

私が見た創立者の日中交流の歩み

洲 崎 周 一

皆さん、こんばんは。このような忙しい時間に、こんなにたくさん集まっていただきまして、大変にありがとうございます。今は、学生にとって一番おなかが空いている時間ではないかと思えます。また、朝からずっと授業を受けていて、一番眠たい時間ではないかとも思えます。それにも関わらず、たくさんの方に来ていただきまして、心より感謝申し上げます。

先ほど話がありましたように、私は、創価大学の3期生、創価大学の出身であります。ですから、大学に帰って来るたびに、本当に懐かしいなと思っております。ちょうど今年は、私が卒業して30年になります。ですから、皆さんが生まれていない時に私は卒業したということです。ここ、S101大教室は、私が学生の時からありました。私もここで授業を受けました。一年生の時には、日本に来たばかりで、日本語もよく分からなくて、授業はほとんどわかりませんでした。ですから、なるべく目立たないような席に座りました。途中で眠ってしまっても大丈夫な隅っこの方に座りました。今度は自分が教壇に立ってみると、学生の時に大変な間違いをしていたことに気がつきました。話している人は、意外に目の前の人を見ないのです。しゃべっている人に一番よく見えるのは、一番後ろの方です。もし、皆さんが、先生に気付かれなくて眠りたい時は、近くのこのあたりとか、この真ん中あたりが死角です。これだけは教えます。先生方はおそらく誰も教えてくれないと思います（笑い）。

滝山寮の思い出

私は、3期で入学しまして、滝山寮に入りました。当時は、一部屋12人というマンモス部屋で、そこでいろんな意味で訓練を受けました。私が寮に入って一番ビックリしたことは、言葉が通じないということです。私は香港で育ちましたので当然といえば当然なのですが、入学までには、「おはようございます」とか「こんにちは」とか、普通の会話くらいは覚えてきました。ところが、寮に入ったらそれが全く聞き取れないことに驚きました。後でわかったのですが、入寮してくる人は、地方から来る人ばかりです。東京に住む人たちは、寮に入れません。ですから、寮の中で一番正しい日本語をしゃべっているのは私でした。そのほかの学生は、関西弁とか徳島弁とか、わけのわからない方言でしゃべっていますので、本当に苦労しました。沖縄の方言も本当に分りませんでした。でも、何事も無駄はないもので、聞き慣れてしまうと、なんとなく意味が分かるようになりました。この寮の経験は、今、通訳として大変役に立っています。皆さんが全て

標準語で話してくれるわけではありませんから。入った時から、楽しく寮生活を送ることができました。

入学した時は、大学はまだまだ草創期、建設中でした。道も舗装してないし、八王子駅からバスに乗っても、「滝山城址下」で降りて、そこからトコトコと、道でもないような道を通って寮に行くというような状況でした。寮から学校へ行く時も、途中で蛇も横で一緒に並んでいるというような道を通る、そういう時代でした。でも、懐かしく、未だに忘れられません。

草創期の1、2、3期生の一番典型的な共通点は何かという、ひとつは、創立者池田先生を求めるといふ精神、これは誰にも負けません。もうひとつは、皆お金がない、貧乏であるということ、これも誰にも負けないような貧乏学生ばかり集まりました。当時は、裕福で仕送りをたくさん送れるというような状況ではありません。両親たちは、本当に苦しい生活の中で、一生懸命頑張って、先生のもとへ、自分の子どもを送ろうという方々ばかりでした。寮にたどりつくだけで精一杯でした。旅費がなくて山口県から自転車で来た人もいました。当時は、今のように車を持っている寮生はいませんでした。一番裕福だと思われる人がバイクを持っている人です。バイクがあれば、八王子駅まで行ける。そういう人が一番裕福な人でした。私の同じ部屋の先輩で一人だけ、乗るとガタガタと音のするような、非常に古いバイクを持っている人がいました。その人は私たちの憧れの的でした。誰であるかということ、田代理事長です。当時から、彼は優れた学生でした。バイクを持っているということで、本当に皆から尊敬と羨望の眼差しを集めていました（笑い）。

そういう時代でしたが、皆楽しく暮らしていました。寮の中では、食生活も大変でした。卵を持っている人が大富豪みたいに見えました。食べられない人は、その卵を一個だけでも恵んでもらえたらどれだけ嬉しいことか。私と同じ部屋の同級生が、こんなことをしておりました。彼は紅茶のティーパックを持っていたのですが、無駄なことは絶対にしない。私の記憶では、ティーパック4つを1ヶ月も使っていました。彼がどういう風に4つで1ヶ月飲むのかということ、1回使い終わると、ティーパックを木製の本棚に画鋏でさして、毎日一袋ずつ4日使います。5日目は、初日のティーパックを再び使います。そして、また後ろにさして、干しながらそれを使っていました。たしかに、1ヶ月もちましたが、私はその紅茶はどのような味か、想像したくもありませんでした（笑い）。そのような時代でした。この滝山寮からたくさんの素晴らしい先輩や同輩が出ております。さきほど申し上げた田代康則先輩、そして、アメリカ創価大学学長の羽吹好史先輩、それから、創価学会の理事長になっている正木正明さん。正木さんは同期です。みんな寮出身です。貧乏でしたが、誇りだけは、先生を求める精神だけは、誰にも負けない、そういう時代でありました。

初めての通訳

私はお陰さまで、いろんな意味で勉強させていただきました。そして、さきほど神立先生が紹介してくださったように、1974年、1年生の終わり頃ですが、池田先生が香港を訪問することになりました。そして私に、初めて海外から来た留学生だから、また、お金も無いだろうから連れ

で行ってあげようと言ってくださいました。本当に嬉しかった。何もできない私は、とにかく周りをうろちょろしているだけでしたが、それでも満足でした。毎朝、先生が起きる前に、ホテルのお部屋の外で待っていますと、奥様がドアをあけて、「周くん、入りなさい」と声をかけてくれました。部屋の中に入ったら、奥様が用意した朝食を、先生は食べながら、新聞を読んだりテレビを見たりしていました。もちろん、新聞もテレビも中国語か英語ですから、先生はわかりません。そこで、「周くん、今、テレビは何をやっているの」「この新聞にどんな記事が出ているの」と質問されました。私は、あまりできない日本語で、一生懸命説明しました。それを聞き、うなずきながら、先生は朝食をとられていました。香港に連れて行っていただき、先生がSGI（創価学会インタナショナル）の会長として、海外のメンバーを心から激励されておられる姿を目の当たりにして、この人を自分の人生の師匠としたことは間違っていない、一生ついていこうと決意を固めました。

香港訪問の中で、香港中文大学を訪問しました。当時は、創価大学と海外の大学との交流は全くありませんでした。そんな中であって、先生は交流の道を自ら開いてくださいました。そして学長に、「まだ若い大学ですが、どうか宜しくお願いします」と話をしました。学長は、先生の人格に感動し、この大学とならば交流したいということで、交流協定を結ぶことになりました。創価大学は、現在百を超える大学と交流していますが、中文大学がその最初の大学になりました。創立者自ら交流の道を開いてくださったのです。このような大学はどこにもないと思います。

中文大学の教授との懇談の際に、私はそばで立っておりまして。すると急に「周くん、通訳しなさい」と言われ、ビックリしました。「はい」と言って、通訳を始めました。それが、私に対する最初の訓練でした。先生の話された難しい内容を私は半分も分かっておりません。そして中文大学の教授はなんと北京語をしゃべっています。ほとんど3分の1くらいしか分かりません。そのなかで私は通訳をしました。会話になったこと自体が奇跡だと思います。これが、はじめての通訳でした。この経験で、まずは力をつけなければならないと思い、それから一生懸命日本語の勉強をしました。

香港訪問の最後の日の朝、いつものように呼ばれて部屋に入りました。すると、「今度、中国へ行くからね」と言われました。「すごいな」と思いました。でも、ピンと来ませんでした。次の言葉は、「君を通訳で連れていくからね。大変なショックを受けました。すぐさま、「いや、私にはできません」と断りました。「なぜ、できないの」と聞かれ、「広東語と北京語は違います」と懸命に説明しました。やっと先生が納得してくれました。「残念だね」と言われたことは未だに忘れることができません。力のない私にそこまで期待してくれているにもかかわらず、それにお応えできないという情けなさ。その時から、私は、北京語を一生懸命勉強するようになりました。

先生は、その年（1974年）の5月30日に初めて中国を訪問されました。私も『聖教新聞』で読み、ニュースを見ました。北京語ができれば、今、その場に立っているのは、自分だったろうなと思いました。しかし、日本と中国との交流はこれからますます大事になってくる。しっかり北京語を学ぼうと再度決意し、それからさらに懸命に北京語の勉強を続けました。その後、大学院に進学し、間もなく卒業するという時に、急に先生に呼ばれました。そして、もう一度、「今度

中国に行きます。通訳を頼むね」と言われました。その時、私は「はい」と、大きな声で答えました。でも、返事をしてから「しまった」と思いました。まだまだ力がないのに、よくあんな返事ができたなと思ったからです。その時から、辞書にかじりつくように北京語を覚えました。それが1978年の第4次訪中の時です。当時、私は大学院の2年生で、修士論文を提出しなければなりません。修士論文を提出するには、当時は外国語の試験を受けなければならないのです。私は第2外国語にフランス語を取っていました。ですから、英語とフランス語の両方の試験を受けなければ、論文提出資格がありません。ところが、その試験日が、訪中している期間中だったのです。そんなことは、まったく眼中にありませんでした。とにかく訪中に随行させていただけることだけで頭が一杯でした。今回卒業できなくても、来年があるじゃないかと思い、一生懸命訪中の準備をしていました。訪中に同行するメンバーが発表された時、私はビックリしました。普通なら、創価学会の訪中団ですから、学会本部の関係者で構成されるだろうと思っていました。ところが、その中に創価大学の代表も入っていました。なんと私の所属する経済学部の学部長や、今日、会場に来られている高村忠成先生も入っていました。なんと素晴らしいことだろう。その時は、それで終わったのですが、後になって、これがどんなに重要なことであるかがわかりました。高村先生から「大学の特別な計らいで、外国語の試験を、試験日に中国で受験することが許されました」と聞きました。これは夢にも思っていないことです。嬉しいニュースというか、また、悲しいニュースというか（笑）。つまり、初めての訪中だけでも大変なのに、その中で、英語とフランス語の試験も受けなくてはいけないということになったのです。これは大変だと思いました。でも、これは、ありがたい計らいだなと、深く感じました。

訪中の途中、蘇州で宴会があって、それが終わってホテルに戻ると、学部長から「じゃあ、これからだ」と言われました。部屋の一室に閉じ込められて、こわい学部長の目の前で英語の試験を受けました。次に、高村先生の前でフランス語の試験を受けました。翌日、池田先生から、「出来はどうだ」と聞かれて、慈悲深き高村先生から、「大変よくできました」という言葉をいただいて、先生も安心され、「よかったね。よかったね」と言われました。私もホッとしました。嘘でもいいからそのように言っていただいて、ありがたいなと思いました。お陰さまで、試験は通りまして、修士論文も提出して、無事卒業できました。それが私の最初の訪中のエピソードです。それから今日までずっと、先生の中国語の通訳をさせていただいております。

鄧穎超先生との交流の思い出

次に、私が同行させていただいた際に、強く心に残っているエピソードを話したいと思います。

一番記憶に残っているのは、池田先生と周恩来総理の奥様である鄧穎超先生との交流です。残念ながら、私は、第2次訪中での池田先生と周総理との会見時には、まだ通訳ではありませんでした。ですから、周総理との会見には同席しておりません。しかし、周総理が亡くなった後、第4次訪中の時、先生が最初に会見された国家要人が、鄧穎超先生であり、それが二人の初めての出会いでした。幸いにも、私はその場に同席させていただきました。この時から最後の会見まで鮮明に覚えています。鄧穎超先生という方は、ずっと周総理を陰で守ってきた方です。周総理が

生きておられる間は、周総理の健康の面倒をみるために、一切、表舞台に出てきませんでした。周総理が亡くなって、四人組が終ったあとで、はじめて、周総理の代わりに鄧姉さん、ぜひ出て来て下さいという民衆の要求があって、それを鄧穎超先生が受けて、政治の表舞台に出て来られました。その時、鄧穎超先生は、中国の婦女連合会の名誉主席になったのです。婦女連の名誉主席という立場で、人民大会堂で第1回目の会見をしました。初めての会見にも関わらず、鄧穎超先生は、非常に親しげに池田先生と奥様に声をかけました。「よく知っています。私は、恩来同志からあなたの話をよく聞いておりました」と、最初からそう話されました。そして、「初めてお会いしたとは思えない」と言われ、懇談が始まりました。本当に最初に会ったとはとても思えないほど、自分の子どものようにかわいがってくださるんですね。そういう姿を目の当たりにして、中国の偉大な婦人というのは、すごいなと思いました。こういう風に全ての人を暖かく包まれるのだな、鄧穎超先生はすごい人物だなと思いました。

会見の席上、池田先生は、「周総理に日本に来ていただきたくてもそれは実現できなかった。その代わりに鄧穎超先生はいついらっしゃいますか」と聞かれました。ちょうどその頃、日本、いや全世界が、実はそのことに注目していました。初めて鄧穎超先生が政治の舞台に出てきて、周総理の代わりにいつ日本を訪問するかということが話題になっていました。そのようなことは、軽く簡単に答えることができる問題ではありません。鄧穎超先生は、中国を最も代表する婦人政治家なのですから。しかし、本当にわが子に対するように、「それでは、来年の春に行きましょかね、桜の咲く頃に」と言われました。池田先生は、周恩来総理に桜の咲く頃にぜひ来てもらいたいと話されていましたし、鄧穎超先生にもぜひ日本の桜を見ていただきたいと考えておられましたので、大変に喜ばれました。そして、この一言が、「鄧穎超、明春日本訪問」ということで、翌日の日本の大きなニュースになりました。鄧穎超先生は、「また、日本でお会いしましょう」と言われ、「日本へ行ったら、池田先生のお家まで行きたいな」、「創価大学へも行きたいな」ともおっしゃっていました。

翌春、鄧穎超先生は本当に日本を訪問されました。そして、日本の赤坂の迎賓館で池田先生と会見しました。ちょうどその年は、春にも関わらず異常気象で、東京の桜が例年より早く散っていました。そのため、鄧穎超先生が着いた日には、もう桜を見ることはできません。池田先生は、「鄧穎超先生に桜を見せたかった。残念だね」と話されていました。しかし、会見の日に、東北から、これからちょうど咲く頃の桜の木を取り寄せて、会場に飾っておかれたのです。鄧穎超先生は大変に喜ばれました。「日本に行って、桜を見ようと思っていたけれど、もう無理だなと思っていたら、池田先生がわざわざ桜の木を運んできて見せてくれました。本当に嬉しい」と、少女のように手をたたいて喜ばれました。「桜を見ることができました。恩来同志も喜ぶだろうな」と喜んでおられました。話がはずんだあと、鄧穎超先生は、「私は、ひとつ池田先生にお詫びしなければいけません」とおっしゃいました。なんだろうなと思っていると、「実は、先生の家に行きたいとお約束しましたが、日本の政府の招待で来たので、先生の家に行かせてくれないのです」。鄧穎超先生は、中国を代表する政治家ですから、一民間人の家に行かせるわけにはいかないのですね。「今回、先生の家に行くのは無理でした。残念です。ぜひ、今後、機会があったら行きたい

と思います」とおっしゃいました。また、「創価大学にも行けなくて残念だ。創価大学には、周桜があると聞いています。本当に行きたいな」とも言っていました。そして、そばにいた符浩大使に、「大使、私の代わりに行ってきてください」と命じました。大使はその言葉を実行して、創価大学を訪問しました。そのように、ひとつひとつ約束したことをちゃんと覚えていて、できるかできないかをはっきりさせて、できないことはお詫びされました。これもまた、すごいなと思いました。

すると、今度は池田先生から、「鄧穎超先生、私はあなたに、申し訳ないけど、ひとつのお知らせがあります」と。ちょうど、会見が終わり、周りに人がいなくなった頃、小さい声で「ひとつだけ、あなたに先にお知らせしなければいけないことがあります」と言われました。私は、なんのことだろうなと思いながら、その言葉を通訳しました。「そろそろ私は創価学会の会長を辞めたいのです。辞めることになった」とおっしゃいました。私は通訳しながら、きっと冗談をおっしゃっているのだろう、どうやって訳せばいいのだろうかと思いましたが、そのまま訳して伝えました。鄧穎超先生がそれを聞いて、立ち止まりました。そして、「池田先生、それはいけません。人民はあなたを求めています。求められている以上は、あなたは辞めてはいけません」と凛として諭されました。池田先生もそれを受けとめて、「わかりました」とおっしゃいました。そして二人は別れたのです。私は、池田先生の冗談だと思っておりました。私の経験不足というか、浅かかったです。その時、色々な策謀があって、会長を辞めなければならないような事態があったのです。それを私は、そばにいながら全く感じていませんでした。会見をした日は、4月12日です。会長を勇退されたのは、4月24日です。わずか12日後です。鄧穎超先生におっしゃったことは本当だということが、その時初めて分かりました。悔しかった。鄧穎超先生からあれ程言われても、やっぱり辞めざるをえないような理由があったのだということ、初めて理解することができました。後になって、色々な話を聞いて、その時の状況が初めて分かりました。申し訳なかった。もう少しそのお気持ちが分かっていたら、もう少し適切な通訳ができただろうなと思います。このことは、未だに忘れることはできません。それ以後先生は、創価学会会長ではなく、創価学会名誉会長として活躍されることになり、それから何回も中国を訪問し、また何回も鄧穎超先生と会見されました。

次の第5次訪中の時には、鄧穎超先生は、「家族のようなものですから、人民大会堂のような固いところではなく、我が家にいらっしやい」と言われました。ほとんど誰も呼んだことのない、中国の要人が住んでいる中南海の、周恩来総理と一緒に31年間住んでいた自宅に招待してくださいました。そして、鄧穎超先生は、玄関で立って迎えてくれました。「今年初めてのお客は、池田先生だよ」と喜んで歓迎してくれました。それだけではなく、会見が終わったあと、部屋をひとつひとつ案内してくれました。この部屋は周総理の寝室、ここは周総理の執務室、これは周総理と私が一緒に植えた何々の木、というように、いろんな思い出をひとつひとつ詳しく説明してくれました。お部屋を見ていると、これが一国の総理の住まいかと思うほど、本当に質素なものでした。貴重品は何一つありません。置いてあるものは古いものばかりで、日本では、おそらく、古物市に出しても誰も欲しくないような物ばかりが置いてありました。このようなところで、周

総理は仕事をやっていたのだ。このようなところで、周総理は中国をずっと引っ張ってきたのだ。そういう思いがいたしました。

1990年、第7次訪中の前に、鄧穎超先生は入院されていました。ですから、「今回はお会いできないだろうな」と、池田先生は奥様とお話されていました。ところが、現地に着くと、「鄧穎超先生が自宅でお待ちしておられます、お会いしたい」との連絡がきました。それで、ご自宅に伺いました。鄧穎超先生は、自宅の玄関で立って迎えてくれました。後で秘書の方から聞いた話ですが、前日まで入院されていたそうです。医者は病院から出たくない、しかし、鄧穎超先生はぜひ先生にお会いしたいということで、その日、1日だけ自宅に帰させてもらったとのことでしたが、ずっと車椅子でした。私たちが着く直前まで、車椅子に座っていて、着くと、立って出迎えられました。すごい人だなと思いました。

その時、池田先生とお会いするのは最後かもしれない、と本人は思っていたのかもしれませんが。周総理が生前愛用されていたペーパーナイフを贈られました。「恩来同志は、非常に質素な生活をしていましたので、周総理の使う物というのはほとんど無いのです。残っている物もありません。これが一番良く使っていたペーパーナイフです。ぜひ、池田先生に差し上げたい。恩来同志も喜ぶだろうと思います」とおっしゃいました。後で聞いた話ですが、ペーパーナイフを贈ることに対しては、ただでさえ少ない周総理の遺品を外国人にあげるなど考えられない、と中国政府から大反対されたそうです。しかし、それも鄧穎超先生の「私が決めましたから。これで恩来同志も喜ぶと思います」との一言で決まったそうです。それから今度は「私がいつも使っている筆立です。これも、私の記念として、池田先生に差し上げます」とおっしゃり、周総理夫婦の記念品をその場でくださいました。これが鄧穎超先生との最後の会見になりました。このふたつの記念品は、先生が大事にお持ちになっておられます。また、時に展示会に出して下さっております。周総理と鄧穎超先生の真心が込められているものであると、今度見るときは、ぜひそのような思いで見ただければと思います。私にとって、この鄧穎超先生との交流は、訪中させていただいた中で一番記憶に残っている出来事です。

第1回の中国からの留学生

その次に、創価大学と一番関係があるのは、なんとといっても第1回目の中国からの留学生の受け入れです。当時、私はまだ滝山寮にいました。2年生で、一応先輩ということで残寮していました。これから中国から初めての留学生が来ると聞いて、ビックリしました。また大変期待しました。中国政府が日本と国交回復したあとに一番大事であると考えたのは、これからの日本と中国の交流関係を背負っていける人材を育てることでした。ご承知の通り、それまでの中国は文化大革命のために海外との交流を一切断絶していました。その十数年の間は、日本と中国の交流もありません。ですから、日本のことを分かっている若手もいないし、日本語を話せる若手もいません。中国政府は、長い目で見えて一番大事なのは、そういう青年を育てていくことであると考えました。そこで、全国から優秀な学生を選んで日本へ送りました。日本には有名な大学がたくさんありますから、留学生全員を受け入れてくれるだろうと信じておりました。ところが、日本に

来た学生たちは行くところがなかった。日本の有名な大学は、うちの大学は受け入れるような機関がありません、受け入れるような施設がありません、と様々な理由で全部断りました。学生たちは困っていました。一番困っていたのは誰かというところ符浩大使でした。大事な学生を預けられて、受け入れる大学がないと困っていました。そこで思い出したのが、池田先生でした。創価大学でした。先生を大使館に招いて、「実は、6人の留学生をどうしても受け入れてくれるところがありません。できれば、創価大学でお願いできないでしょうか」と話しました。先生は、即座に、「分かりました。創価大学で受け入れましょう」と。さらに、「私とその6人の留学生の保証人になってあげます」とおっしゃいました。大使は大変に驚かれ、「池田先生、本当に感謝します」と言いました。こうして、6人の留学生が創価大学に入ることになったのです。

私たちも、寮に初めて共産主義の国の人達が来るわけですから、どうすればいいかと、事前に残寮生で懇談会を持ったりして、様々忙しかったと記憶しています。しかし、来てしまえば普通の学生であるということが分かりました。もちろん、普通の学生ですが、彼らはれっきとした共産主義者です。小学校からみっちり共産主義、毛沢東主義など、いろんなことを教えられてきております。私たちが、初めて共産主義の学生を受け入れるのと同じように、彼らは生まれてからずっと共産主義の国で暮らしていて、初めて資本主義国家へ行くということで、彼らにとっては私たち以上に緊張していたと思います。しかも、中国にいる間に、いかに資本主義を名乗る国が怖いかということ、みっちり教えられていました。恐ろしいところへ行くという覚悟で、緊張して、日本に来ておりました。寮生活は、彼らにとっては恐らく、一番大きな最初の難関だったろうなと思います。実際にそうでした。入寮した翌日、朝から「カンカンカン」と大きな音で起こされました(笑)。そしてなんと、自分たち以外のほとんどの人たちが一つの部屋に集まって、お経を唱えている。なんという所に入ったのだろう。創価大学と聞いていたが、創価寺じゃないか。どうなっているのだろうか、彼らはビックリしました。そして、全ての日本人は、朝はお祈りからはじめるのだと思いました(笑)。そういうところから、彼らの寮生活が始まりました。今度は、朝食に生卵が出されました。生まれてこの方、生卵を食べたこともない人たちです。ゆで卵と思って割ったらベチャッとなってしまった。駄目になってしまった。彼らはビックリしました。どうして、ゆでてない卵を出したのかと詰問したら、みんなから生卵をかけて食べるんだと言われました。彼らは、日本での生活の最初にこのことを覚えました。そのようなことからお互いにいろんな意味で勉強し合えるようになりました。私たちも彼らの生活を大変奇異に思っていました。彼らは、毎朝早く、皆で集まって寮の屋上へ行きます。大きい声で「毛語録」を読みます。そして、みんなでいっせいに体操をします。それが終わってから授業へ行くのです。朝は、私たちは大きい声で勤行する、彼らは大きい声で「毛語録」を読む。どっちの声が大きいかと、朝から競争するのです。そのうちお互いに慣れてしまった。彼らも、「あつ、あなた、今日朝の勤行してないんじゃないの」といいます。そこまで彼らは創大の生活に馴染んできました。そして、本当に仲良くなりました。

先生は彼らのことを大変に心配していました。慣れているかどうかと、大学へ来る度に、彼らと散策しながらいろんな話を聞かれました。寮の先輩たちとも一緒に食事しながら懇談されまし

た。ある時、留学生は、「中国で、私たちは毎日、半日は勉強で半日は労働してきました。創価大学に来て大変よくしていただきましたが、ただ、労働してないので体がなまっています」というような贅沢なことを言いました。先生はそれを聞いて、「そうか、それでは」ということで、「日中友誼農場」を作ってくださいました。大学は当時、まだいろんなところに空地がありましたので、ここで日本の学生たちと一緒に労働してください、何か作物を作ってくださいということになりました。彼らは勉強が終わったら喜々として、そこで芋を作ったり、いろんな作物を作ったりしました。池田先生は、これからも中国語研究会と一緒に交流してくださいということで、自ら「日中友誼農場」という字を、ベニヤ板に書いてくださいました。留学生たちはこのようにひとつひとつ貴重な経験をしました。ある時は、寮の先輩と一緒に、先生とスキヤキを食べました。いろんなものを食べながら、「寮生活は楽しいですか」、「楽しいです」。「いろんな勉強になりますか」、「いろんな勉強になります」と。ある留学生は、「先輩から酒を教えてもらいました」と報告しました。その先輩は一瞬真っ青になりました。先生は、じっとその先輩を見てから、「それも一つの生活の勉強なのだよ」と、軽くかわされました。その後、その先輩がずっと真っ青になっていたのを覚えています。

彼らは卒業して中国に帰り、大使館に勤務したり、中日友好協会で勤務したり、今ではなんと秘書長にまでなっております。彼らは、いまでも、池田先生と創価大学に対して感謝しきれないと言っております。ある人は中国の経済担当の代表として日本に来ました。ある人は大使館に勤めています。あるいは閣僚になっています。女子留学生の一人は、中国との交流を望む日本の大企業の社長や重役たちと交渉する立場で活躍しています。彼女を呼ぶのは難しいことで、会ってこれるだけでもありがたいといわれる存在になっています。ある時、ある大企業の社長から、「その素晴らしい日本語をどこで覚えたのですか」と聞かれました。彼女は「私は、創価大学で勉強しました」と言いました。それを聞いた社長がビックリして、「なんで、あんな創価学会の大学に行ったのですか」と聞きました。彼女は怒りました。「私の誇りです。私は全てのことをそこで学びました。日本語もそこで学びました。そして、日中友好の原点も、私はそこで学びました」と誇らしげに言いました。彼女は後日私たちに、「実はそういうようなことはあちこちで言われました。その時はきちんと、私は創大生です、池田先生の学生です、とはっきり申し上げるのです。それが私の原点です。貿易関係、経済関係をやっているから、けんかも多いです。疲れることも多いです。私は、疲れた時には創価大学へ帰ります。創価大学へ戻って、昔の親友に会って、そこで私は元気を取り戻します。創価大学は私の全ての原点です」と言っていました。

中国の青年との交流

話題が変わりますが、その後も、第二陣、第三陣と様々な留学生が創価大学に来ております。中日友好協会だけではなく、中国の全国青年連合会（全青連）との交流もはじまりました。今の中国の胡錦濤主席も、当時まだ全青連の主席であった頃に池田先生と東京で会見しています。そこで先生は、創価学会の青年と中国の青年との交流を提案して、交流協定を結ばれました。そこから、創価学会の青年部と中国の全青連との交流が始まりました。その第一歩が、全青連からの

留学生の派遣でした。以来、何人も創価大学に留学に来ています。彼らは帰ってから、全青連の日本部と交流を担当する日本処で仕事をしています。全青連というのは、創価学会の青年部と同じように、中国のこれからの国家を背負っていくような幹部を育てていく大事な機関です。ただし、規模が違います。創価学会の青年部は日本では一番ですが、中国の全青連は中国で一番です。なんと、3億5千万人の会員がいます。ゼロが何個あるか、私は算数が弱いのでわかりませんが、そのくらいの会員が全国に散らばっています。そして、彼らと創価大学が交流しているのです。創価大学に留学生を派遣すると共に、毎年一回お互いに交流団を派遣することになっていますが、先日、創価学会が招待した全青連の代表が来ました。中国の青年政治学院から池田先生への「名誉教授」称号授章式の時に創価大学を訪問しました。交流団の日本訪問は、4回か、5回目になりました。中国各地から集まってきた人たちが、先生にお会いするというので、楽しみにしていました。交流団で来られる方々は、皆若いですが、実はそれぞれの地方のトップの人たちです。

こういうことがありました。中国には日本からいろんな交流団が行っていますが、日本との交流を拡大するために、日本中の中国と交流のある団体の青年500人を招待したいという話がありました。そして、各団体から一人か二人の代表を出して、一つの団を作りましょうということになりました。創価学会からも一人派遣してくださいとのことで、創価学会は、中国へ行ったことのない青年を派遣することになりました。ところが、彼が代表団の結団式へ行ったときにビックリしました。集まってきたのは、すべて各界を代表するような人物ばかりです。そして、二人部屋になったのですが、彼と同じ部屋になった人は、自民党の大物議員の第一秘書でした。その秘書は、長い間その議員の中国交流を担当してきました。政治家の秘書ですから、ものすごく力があって、顔も利く人でした。その秘書も「あなたは、中国へ行ったことがないの。そういう人と同じ部屋とは」と驚いていました。彼はどこかの大きな団体の代表と同室だろうなと思っていました。代表は代表だけど、若造で、中国も行ったこともない人で、「何だ、この人は」と、最初から嫌な顔をしておりました。学会の代表になった彼も、こんな大物秘書と一緒にでは立場がないと小さくなっていました。中国に行ったこともないし、中国語も分からないし、どうしようとビクビクしながら交流が始まりました。中国へ着き、北京へ行きました。また、いろんな所を訪問しました。もちろん、同部屋の人は、偉い代議士の秘書ですから、つねに団長の側にいます。そして、どんな宴席でも一番メインのところか、あるいは、その次のテーブルに着席していました。中国側の代表と一番近い所にいました。中国へ行ったことのない創価学会の代表は、中央から一番遠い席に座っていました。ところが、全青連の中心者が、会話の間に、参加者の名簿を見て、創価学会から代表が来ていることに気がきました。そして、「実は先日、創価大学へ行ってきて、池田先生にもお会いしたばかりです。創価学会の代表に会いたいですね」と言いました。メイン席の周りの人も、創価学会の代表が来ていることも知りませんから、どこに座っているのかも分かりません。一生懸命探して、呼んだら、なんと一番遠い所に座っていました。「呼んでるよ」ということで、広い人民大会堂の一番遠いところから走ってきました。「あなたが、創価学会の代表ですか。よくいらっしやいました。実はこの間、代表団の一員として創価大学に行きました。池田先生にお会いしました。本当に立派な方で、私にとって人生の師匠です」と言いました。メイン席

の人たちは唖然としました。まさか、向こうの中心者から創価学会と先生の名前が出てくるなど夢にも思っていませんでした。創価学会の代表も、偉い人たちの前で言われて、真っ赤になって、恐縮して「すいません、初めて来たもので」と言うと、さらに、「立派な先生のもとで仕事をされていて本当に幸せですね」と言われ、よろこんで席に戻りました。それが最初で、各地をまわって、宴会がある度に、中心者が創価学会の代表が来ているなら会いたいということで彼は呼ばれました。そのうちに、遠くから走って来るのではみつともないということで、彼はだんだん中央に近い席に座るようになりました。行くところ、行くところで、中国側の中心者が、「私は池田先生にお会いしました」、「私の人生の師匠です」、「私は池田先生を尊敬しておりました。学生時代から池田先生とトインビー博士との対談を読みました」と言いました。彼は、最初は小さくなっていたのですが、だんだん元気になってきて、「私は、創価学会です」と言うようになりました。最後の晩、同じ部屋の代議士の秘書から、こう言われました。「恐れ入りました。池田先生はこんな偉大な人だと知り本当にビックリしました。うちの議員も池田先生のような日中交流をやれば、もっといい結果になるのだろうな。あなたがうらやましい」とまで言われました。最初は、「なんだ」と言われていたのが、最後に「あなたは幸せだ」と言われるようになりました。このように、池田先生の外交というのは、決して目先のことだけではないのです。相手からの見返りなどまったく考えていません。ましてや、この人にあえば政治的にうまく行くだろうか、あの人に会えば経済的に得をするだろうかという利害関係も考えません。とにかく日中友好という一点だけを、人民と人民との間の文化交流を中心に考えてやってこられたのです。それが今、花開きました。多くの人々が池田先生を尊敬し、偉大な人生の師匠であるという、そのような時代になりました。

35年の交流を振り返って

最後に、国交回復してから35周年になりますが、この35年間の池田先生の交流を見ていて、自分なりにこういう風に総括しております。まず、最初の10年、最初の段階です。それは「基礎作りの時代」であったと思います。最初に中国へ行ったときには、誰も創価学会のことを知りません。宗教団体であるということで警戒もされていきました。周総理が招待したのでなければ、誰も創価学会のような団体を呼びたくもありません。そのような時代でした。先生が、ひとつひとつ丁寧に、常に民間外交の先頭に立って、創価学会はこういう団体である。創価大学はこういうところである。日本はこういう風に考える。日本の人民はこういう風に交流を期待していると、ひとつひとつ道を開いてこられました。その中で、周恩来総理や鄧小平先生という、中国の第一世代の指導者たちと深くその関係・交流を結んでこられました。

そして、次の10年は、「橋作りの時代」であったと思います。創価大学に留学生が来るようになり、創価学会の壮年部や婦人部、青年部やドクター部の訪中など、いろんな交流の機会を作ってくださいました。交流の金の橋が、どんどん太くなっていく時代になりました。その時に、先生は中国の第二世代の指導者である華国峰、胡耀邦、趙紫陽、また、李鵬といった人々と深い交流を結んできました。

第三の10年、これは、「後継者を作る時代」であったと思います。この時代には、今の胡錦濤主席や第三、第四世代の指導者といわれている方々から見ると、池田先生が先輩になりました。会见する中国の方々がみんな若い世代になりました。その時に、先生は、中国の方々と日本の若い青年たちとを交流させよう、そして、中国の若い人たちを育てていこうという、交流の後継者を作る時代に入りました。

そして最後の今の5年間、また、これからの時代は、池田先生が「万代に哲学を残す」時代だと思います。今、中国では、「池田大作研究所」が十いくつもあります。先生の哲学を勉強したいという人たちが、全国にいる。これは、宗教の次元を超えて、池田先生という人間が持っている哲学が、今の時代において一番必要なものであると中国の方々が認識しているからです。これらの研究所は、自らの意思で作ったものです。これから先生の哲学は、恐らく日本よりもはるかに公平に中国で研究され、評価されるようになります。私たちがこういう時代に先生のもとで勉強できる、また、仕事ができるというのはどれほど幸せなことでしょうか。そのことは、今は皆さんがいくら考えても分からないかもしれません。恐らく、5年、10年、20年、30年先に、中国の方に会った時に、「私は、創価大学で学びました。しかも、池田先生がいらっしゃる時に学ぶことができました。お会いしたこともあります」といったら、「すごいねえ」といわれるような時代が必ず来ると思います。創価大学にいる一日一日を、不思議な縁をかみしめながら大切にしていきたいなと思います。

私は30年前に卒業しました。いまだに帰ってくると、心の故郷であると思っています。帰ってくるたびに本当に懐かしいなと思います。ここは私の原点だと思っています。皆さんもそのような時が必ず来ると思います。私は3期生で卒業して、いまはもう化石のような存在で、皆から忘れ去られるような世代になっております。これからあなたたちも、その時の創大生から見れば、化石のような存在になる時代がきます。その時に、自分が創価大学にいたころの思い出を、私と同じように後輩に語っていただければ、池田先生の思想は万代に伝わっていくのだろうと、私は確信しています。最後までご静聴いただき大変にありがとうございました。